俳句

大津俳句会

湖を囲むごとくに犬ふぐり　井芹眞一郎

野遊びや帽子は枝にかけしまま　秋山　恵

沈黙の覚めて草木の芽吹きかな　市原　初女

三度目の麦踏み終えし漢（おとこ）かな　大塚喜久子

新しき靴と心で青き踏む　佐賀　久子

魁（さきがけ）はしどろもどろの初音かな　松尾　昭雅

はらからの集ひ賑やかひなの宴　岡崎　浩子

角曲る視野に飛び込む花みもざ　佐澤　俊子

俳句

つのはな句会

白魚や幼き頃の魚売り　水野　春子

黄砂降る大河は今も蕩々と　梅木トキエ

白魚を食って我ら野生人　塚本　洋子

桃咲いて笑う如くに鳴く鴉　榮田しのぶ

春夕焼け　病む木も街も立ち上がる　志賀　孝子

手びねりの小鉢に木の芽和えたっぷり　田上　公代

朝刊の届く音にもはずむ春　木庭　杏子

春陰や伐採を待つ樹々の列　上杉　波

人間くさい風も折り込み木々芽吹く　矢嶋　道子

短歌

大津短歌会

閉ざされし学舎の閉校記念日の夕陽をうけてひっそりと建つ　鞍　岳志

越し方の昭和、平成、令和にて薔薇（そうび）の花を大いに咲かせむ　管野　静

カートにて秋の万華の九重公園めぐりめぐりて至福の一日　豊岡ミツル

惜別の憶い遥かによみ返る田耕（おこ）す父母のありしを　吉永　恵子

草取りの吾に釣られ跳び出せる痩蛙ほら外は寒いぞ　坂本　杲子

梅造花居間に飾りて眺むれば平安の世の道眞偲ばる　小平　善行